

マダガスカルのフランス語文学

伊 川 徹

Nascuntur poetae, fiunt oratores.

— Cicéron

昨今フランス内外で最もよく読まれているフランス語表現の文学の作家を挙げるならば、チェコの Milan KUNDERA であろう。またフランスで最も権威ある文学賞、ゴンクール賞 le prix Goncourt の近年の受賞者とは言えば、モロッコの Tahar BEN JELLOUN (1987年度)、マルチニックの Patrick CHAMOISEAU (1992年度)、レバノンの Amin MAALOUF (1993年度)、ロシアの Andrei MAKINE (1995年度)、カナダの Antonine MAILLET (1997年度) と例年の如くフランス本国以外の作家がその対象となり、フランス語文学 la littérature francophone がフランス文学 la littérature française を凌駕している現状だ。曾ての宗主国の言語であるフランス語 le français が植民地支配の所産として多民族に共有され、近代の植民地解放に伴って、被支配者が支配者の言語を以て自己表現せざるを得ない状況が生じ、更にそれが文学の領域に広がった結果である。

ところで、1970年代からカリブ海域でクレオール文学 la littérature créolophone が台頭してくるが、スペイン語の criollo (「育てられた人」の意味が16世紀に於ける新大陸生まれの純粹スペイン人を指すに至った) を語源とするこの言葉 créole は本来言語学上の概念であった。被支配者階級の植民地原住民や奴隷などの外来の移住者が支配者階級の植民者の言語を簡略化して使用する必要性から、中国の pidgin English (business English の現地訛り) や南西太平洋の beach-la-mar (語彙の不足を限ら

れた語の結合で補う伝達法)が誕生、それを母語とする二世や三世の登場によってクレオール語 *le créole* が成立したとする考え方である。しかし1980年代に入ると、*créole* が文化人類学の概念として転用され始め、特定の地域に於ける住民の *identité* の流動性の指標となる。この年代を通じてポスト・コロニアル研究と呼ばれる理論的営為の中で取り扱われてきた多様な論点から、カリブ海世界の歴史とそこから生まれたクレオール文学のルーツを俯瞰するとき、ポルトガル・スペイン・イギリスの植民者の襲来によって絶滅させられた先住民とその言語に代わって、珊瑚礁と緑のみを残した島々に労働力だけを期待され、はるばるとアフリカ大陸から連行された黒人たちによって新たに創造された混成言語が誕生し、更にインド・中国・シリア・レバノンからそれぞれ固有の伝統を持った移住者が次々と新たなルーツを加えるという、そこにはまさに移植のみによって形成された奇妙な言語世界の系譜が明らかになる。

果たして本論のマダガスカルの場合もこれに等しく重なり合うのであろうか。

*

カリブ海域諸島の悲劇は1492年10月12日の Christophe COLOMB による San Salvador (近年の調査では Samana Cay) 島上陸に始まる。その後続々と押し寄せたポルトガル・スペイン・イギリスの植民者は初めて遭遇した「異形の侵入者」に抵抗した原住民を掃討し、島々を占領したが、これらの諸国に若干後れをとるかたちで植民地獲得競争に参入したフランスはこれを踏襲しなかった。

18世紀から19世紀にかけてのフランスの対外政策はキリスト教(カトリック)の布教と密接な関わりを持つものであった。フランス政府外交官或いは海軍軍人が植民地化を目論む地域に自国の宣教師を現地情報提供者として派遣し、その宣教師に偶然加えられた、或いは故意に加えさせた弾圧を口実に、今度は海軍陸戦隊を主軸とする軍隊を派遣、相手に布教を認めさ

せた上、そのまま駐留するという実に巧妙且つ狡猾な方法を用いて植民地形成の端緒としたのである。1789年のフランス革命によって、フランス政府は国内的には教会が既得権として持っていた凡ゆる束縛から解放された社会を創造することに努める一方、海外では軍事力を背景にカトリックの宣教師を優遇し、その布教活動を積極的に支援するという極めて矛盾に満ちた政策を展開した。¹⁾

したがって、アフリカ大陸・中東・インド洋・インドシナ半島・オセアニア・中米に至るフランスの植民地では僅かの例外を除いて、先住民が外交団や軍隊に組織的抵抗を試みることもなく、仮に抵抗があっても、原住民を根絶やしにするようなポルトガル・スペイン・イギリス方式は採られなかったのである。当然のことながら、植民地の原住民とフランス人それにアフリカ大陸の黒人、中東アラブ人、インド人、東南アジア人、更には遠洋航海船の恩恵によって、それまでは往来のなかった近隣諸地域・周辺諸島民を加え、それは賑やかな混血が始まり、そこではカリブの植民地の如く混成言語・混成文化が「失われた記憶」の上に再構築されるのではなく、「先住民の色彩」を継承しつつ進展するのである。

*

インド洋の西、赤道の南に位置し、アフリカ大陸の沖合に南北に横たわる巨大な島マダガスカル Madagascar と3つの群島コモロ Comores・セイシェル Seychelles・マスカレーニュ Mascareignes (la Maurice et la Réunion) に人間が住み始めたのは意外なほど歴史が浅く、この中には17～18世紀になってもまだ無人島であったものもある。1500年のポルトガル人の入植に始まり、やがて相次ぐ移民・植民の波が押し寄せ、既に12世紀に侵入を果たしていたアラブ人とポルトガル人それにアフリカ大陸の黒人とインドネシア人の混血が成された。マダガスカルでは19世紀の半ば、女王 Ranavalona I^{re}～III の治世にイギリスとフランスが激しく植民地化の主導権争いを演じ、この国には英仏双方の教会（英国国教とカトリック）

が乱立、人々は両国の文化的影響を甘受した。最終的にフランスがこの争奪戦に勝利し、1787年以来のイメリナ王国 le royaume imérina は滅亡、Ranavalona III は1897年に退位、同年アルジェリアに逃がれた。第2次世界大戦中に日本軍の進攻を阻止すべく再度イギリス軍が南アフリカ軍と共に進駐したが、結局徒労に終わり、1946年にフランスの海外領土 les territoires d'Outre-Mer となった。翌年から反乱が始まり、3月には自治権を主張する東部地域の住民とフランス進駐軍との間で大規模な衝突に発展、死者8~10万人を数える惨事となった。この後10年に及ぶフランスの弾圧に耐えて、遂に1956年、自治権を確立、1958年にマダガスカル共和国 la République malgache の建国に漕ぎ着けたが、その後も政局は安定せず、度重なる政変を経て、漸く1975年にマダガスカル民主共和国 la République démocratique de Madagascar となり、現在に至っている。²⁾

さて、マダガスカル島嶼文学は伝統的口承文学のかたちで発展し、マダガスカル語 le malgache, クレオール語 le créole, コモロ語 le comorien が用いられていたが、植民地化が始まった近世ではフランス語や英語と共に19世紀以来のマダガスカル語、

Le malgache, qui est une langue classée dans la famille malayo-polynésienne, est écrit depuis plusieurs siècles, d'abord avec un alphabet d'origine arabe, supplanté au début du XIX^e siècle par un alphabet latin. L'orthographe a été unifiée par un décret du roi Radama I^{er} en 1823.³⁾

それ以降のクレオール語で書かれたものが同時に通用していた。とりわけマダガスカル語について言えば、聖書の翻訳、印刷出版物の普及、学校教育の発展、更に1866年のマダガスカルの新聞 le *Teny Soa* の創刊に至って、古マダガスカル語 le malgache classique が確立したにも拘らず、1895年から始まったフランスの植民地化（1960年に完全撤退）に伴い、大衆文学やヴォードヴィル芝居などの分野ではいとも簡単にマダガスカル社会の植民地化、西洋化が進んでしまったのである。当然ながら、マダガスカル語文学の活動は国民的レジスタンスに移行し、多様な解釈を可能にする叙情

的・暗示的詩作を行なった Ny Avana RAMANANTOANIA (1916年に陰謀によって国外追放) や DOX は広汎な読者の支持を集めた。

しかし、両大戦間に植民地相互の文学サークルに於いて所謂 *belles-lettres* の運動が幻想詩人 Pierre CAMO や精神分析学者 Octave MANNONI に支持され、*18° Latitude Sud* (南緯18度)、*Capricorne, Du côté de chez Rakoto*, 公には出版されなかった *Revue de Madagascar* などの雑誌がフランス人入植者の間で人気を博し、フランス語表現の文学活動を促したのである。

Si la plupart de ces publications se contentent de porter sur Madagascar un regard étranger, exotique, colonial, il faut noter des tentatives pour nouer des contacts intellectuels avec les îles voisines (en particulier avec le poète mauricien Robert-Edward Hart) et pour donner la parole à de jeunes Malgaches s'essayant à écrire en français (ainsi Jean-Joseph Rabearivelo).⁴⁾

マダガスカルの東に位置するインド洋の小島が1598年にオランダ人に接收され、総督 *Maurice de NASSAU* の名前が与えられた。モーリス島の文学活動は1810年からのイギリス支配下で始まるが、フランス系モーリス植民者の文化的 *identité* の宣言が採択され、様々な保護策も同時に実施された。当時の同島新聞社は多くの詩人や語り部の投稿を歓迎したが、高品位のモーリス出版界が両大戦間に誠実な大衆作家 Robert-Edward HART (Port-Louis, île Maurice, 1891～Souillac, *ibid.*, 1954) を誕生させた。彼は生まれ故郷の島の文化的多元性に魅了され、そこからの詩作の豊かさに期待しつつ、高踏派や象徴派の着想を得て、心の内なる不安の音楽的表現を進めたのである。数多くの詩集や小説作品群に彼の一途な探求心が奇妙な自然主義的汎神論を繰り広げ、同時に空想的な幼年時代への回帰、この島の神秘性の称揚を展開させる。*Mer indienne* (1925), *Mémorial de Pierre Flandre* (1928) などの作品がある。

このようにマダガスカルのフランス語表現による文学活動は周辺諸島にまで影響を及ぼした訳で、1920年以降、前掲の雑誌は Jean-Joseph

RABEARIVELO (Tananarive, Madagascar, 1903~*ibid.*, 1937) のように若く、才能のあるマダガスカル人作家にも支持され、フランス語とマダガスカル語の *bilingue* による国民文学の称揚を惜しまぬことになる。第2の言語フランス語を用いて、後期象徴主義に向かおうと試行錯誤を繰り返した後、彼は詩型の縮列転換について、示唆に富んだ母語の借用による作詩法を思いついた。それは *le hain teny* と呼ばれる作詩法で、その意味は

Le nom même de *hain teny* fait problème. On pourrait le traduire par «science du langage» ou mieux par «science et pouvoir des mots». En fait, le *hain teny* appartient à cette forme élémentaire, universelle, peut-être fondatrice de la poésie, qu'est le **chant alterné**: poème qui se développe par les parallélismes, les oppositions, les renversements de deux voix s'affrontant.⁵⁾

ということであるが、マダガスカル伝統の文学のジャンルとして、この地を訪れた外国人の関心を引いた。しかし、宣教師たちは *le hain teny* に性的なものの遍在を感じ取り、一般にその借用や引用を禁じてしまったのである。確かにこれは2人の詠み手が難解な諺や意味不明の質問用紙をお互いに交換し合って、歌を詠み競うというマダガスカル伝統の詩的才気比べとでも言うべき謎々遊びであり、多重な象徴のイメージであるが、一方では

Les *hain teny* sont improvisés par deux récitants rivaux, à tour de rôle, au cours d'une joute poétique. Ce sont des poèmes d'amour, ou, plus exactement, de querelle amoureuse: ils mettent en scène les avances du désir, les esquives de la coquetterie, les désenchantements, les tromperies, les ruptures...⁶⁾

という側面を持ち、宣教師たちの危惧は当たっていた。

ところで、Jean PAULHAN (Nîmes, 1884~Paris, 1968) が1908年から1910年までこの地の *collège de Tananarive* に教員として着任し、マ

ダガスカルの箴言研究を始めたが、勿論 *le hain teny* への興味がその動機となったことは言うまでもない。彼はその後1936年まで滞在、1913年に *Les Hain teny merina: Poésies populaires malgaches recueillies et traduites par Jean Paulhan* と題する研究書を、次いで1939年には *Les Hain tenys* を刊行した。1978年に Gallimard から *Colloque sur la traduction poétique* 所収の《Les Traductions poétiques des *hain teny*》を、1983年には *Du ohabolana au hain teny: langue, littérature et politique à Madagascar* と題する論文を発表した Bakoly DOMENICHINI-RAMIARAMANANA が Ranaivalona I^{ère} 治世 (1828~1861) の *le hain teny* の写本を入手、これに彼自身、Jean PAULHAN, Jean-Joseph RABEARIVELO, 後述の Flavien RANAIVO がそれぞれ仏訳を試みているので参照したい。

Midona ny any Ankaratra
 Veky tsipelana ny any Anjafy
 Mitomany Zanaboromanga
 Mitokaka Ratsimatahotody
 Raha todim-paty koa aza manody
 Fa raha todim-pitia manodiava
Hainteny d'autrefois, éd. Librairie Mixte, Tananarive.

La pluie tonne en Ankaratra
 L'orchidée fleurit à Anjafy
 Il est dur d'oublier tout d'un coup,
 Il est aisé d'oublier peu à peu.
 Elle pleure, La-fille-de-l'oiseau-bleu
 Il rit, Celui-qui-ne-craint-pas-le-retour.
 Retour de mort, ne retournez pas
 Mais retour d'amour, retournez.

Jean Paulhan, *Les Hain-tenys*, éd. Gallimard.

— Uu seul coup de tonnerre dans l'Ankaratra, et les orchidées d'Anjafy fleurissent, et pleure et pleure la Fille-de-l'Oiseau-bleu, et ricane et ricane Celui-qui-ne-craint-pas-le-Châtiment-du-mal!

— Châtiment de meutre? qu'il y soit sursis! Châtiment d'amour? qu'il soit appliqué!

— Si c'est un voile de tête qui ne sache faire ressortir la beauté, si c'est une façon de se draper qu'on ne puisse porter publiquement, allez donc rentrer chez vous: la nuit tombera avant l'heure!

Jean-Joseph Rabearivelo, *Vieilles Chansons des pays d'Imerina*,
Revue de Madagascar.

Il tonne,
il tonne dans les monts d'Ankaratra.
Et fleurissent,
fleurissent les orangers d'Anjafy.
Elle pleure,
elle pleure la-fille-de-l'oiseau-bleu,
et ricane,
ricane celui-qui-ne-craint-pas-le-châtiment-en-retour.
Si châtiment de mort,
qu'il y soit sursis;
si châtiment d'amour,
qu'il soit appliqué.

Flavien Ranaivo, *Hain-teny*. éd. Publications Orientalistes de France.

Que gronde l'orage au Mont-des-Immortels
Au Pays-des-Enfants fleurit l'orchidée

Éclatent les pleurs de Jeune-Tourterelle
Éclatent les rires de Ne-craint-le-retour

Ne soit pour le deuil aucun juste retour
Mais soit pour l'amour la justice accordée

Bakoly Domenichini-Ramiamanana, *Colloque sur la traduction poétique*, éd. Gallimard.⁷⁾

さて、RABEARIVELO は *Presque songes* (1934), *Traduit de la nuit* (1935), *Vieilles Chansons des pays d'Imerina* (1939) などの作品を残したが、物質的生活苦と強い道徳観念的苦悩が共に解決できず、1937年に自殺を遂げてしまう。以下は彼の *Traduit de la nuit* 所収の3つ目の詩である。他の数多くの詩歌同様に夜明けの象徴を神秘的な仔牛の誕生を以って示唆している訳だが、読者の心理状況に応じて様々な意味をこのイマージュは語りかけるのである。発話行為の条件次第で様々な意味を持つマダガスカル箴言詩 *le hain teny* のように…

La peau de la vache noire est tendue,
Tendue sans être mise à sécher,
Tendue dans l'ombre septuple.

Mais qui a abattu la vache noire,
Morte sans avoir mugé, morte sans avoir beuglé,
Morte sans avoir été poursuivie
Sur cette prairie fleurie d'étoiles?
La voici qui gît dans la moitié du ciel.

Tendue est la peau
Sur la boîte de résonance du vent
Que sculptent les esprits du sommeil.

Et le tambour est prêt
 Lorsque se couronnent de glaïeuls
 Les cornes du veau délivré
 Qui bondit
 Et broute les herbes des collines.

Il y résonnera,
 Et ses incantations deviendront rêves
 Jusq'au moment où la vache noire ressuscitera,
 Blanche et rose,
 Devant un fleuve de lumière.⁸⁾

それから10年後、植民地特有の理不尽な訴訟のために流刑になった Jacques RABEMANANJARA (Mangabe, Madagascar, 1913～) が牢獄から祖国開放を戦う愛国心に満ちた抗議声明を出した。彼は1946年の選挙でマダガスカル海外領土の下院議員に当選したが、翌年3月の反乱に加担した事で懲役刑を宣告されたのだ。彼の独房からは反逆の長詩 *Antsa* (1947) が友人の許に届けられ、牢獄の詩 *Lamba* (1956) と *Antidote* (1961) では黒人性への志向が窺えるようになった。一方では彼は未開人の源流と純血への郷愁を詠んだ *Lyre à sept cordes* (セネガルの Léopold Sédar SENGOR が刊行した *Anthologie de la nouvelle poésie nègre et malgache de langue française* [1948] 所収) の中で生まれ故郷の島の讃美を忘れてはいない。1957年には、最初にこの巨大な島に到達したマダガスカル人たちの夢が繰り広げられる戯曲 *Les Boutriers de L'aurore* を著わし、圧倒的支持を得た。その後、マダガスカル共和国の初代大統領 Philibert TSIRANANA 政権下で閣僚入りを果たしたが、優れた文学者は優れた政治家でもあるという国家草創期の事例であろうか。

ところで、隣の島モーリスの作家 Edouard J. MAUNIK (Flacq, îles Maurice, 1931～) は彼同様、若い頃に流罪になった体験があり、ラジオ放送関係者、新聞記者、国際組織の役人などを経て詩人になった。彼の作

詩法は問題提起された語や事物から同心円状に歌が詠み進められるもので、例えば基本となる語 *la mer* が与えられると、それは *l'île > la mère > le père > la parole* という具合に広がり、今度はそれらが応酬し合い、更に詩から詩へと言い換えられるのだが、まさにこれはマダガスカルに於ける *le hain teny* の様式ではなかろうか。1989年の詩歌 *L'Anthologie personnelle* では、ゆったりとしたこの作品の「広がり」と「強さ」を計測し、クレオールのリズムで拍子を取りながら、シンコペーションと省略、出会いと交配、混合と交換を称揚する彼独自の作詩法を確立した。他に *les Manèges de la mer* (1964), *Mascaret ou le livre de la mer et de la mort* (1966), *Ensoleillé vif* (1976), *En mémoire du mémorable* (1979), *Paroles pour solder la mer* (1988), *Toi laminaire* (1990) などの作品がある。

さて、RABEMANANJARA は獄中の自分のところへ明日の処刑を告げにやって来た看守が遺書を認めるようにと差し出した書類に *Antsa* の長詩を綴ったのだと語り、それが牢外へそして友人の手を経て出版されたことは前述の通りである。以下はこの苦難の詩の冒頭である。

Île aux syllabes de flamme!
 Jamais ton nom
 ne fut plus cher à mon âme!
 Île,
 ne fut plus doux à mon cœur!
 Île aux syllabes de flamme,
 Madagascar!

Quelle résonance!
 Les mots
 fondent dans ma bouche:
 le miel des claires saisons

dans le mystère de tes sylves,
Madagascar!

Je mords ta chair vierge et rouge
avec l'âpre ferveur
du mourant aux dents de lumière,
Madagascar!

Un viatique d'innocence
dans mes entrailles d'affamé,
je m'allongerai sur ton sein avec sa fougue
de plus ardent de tes amants,
du plus fidèle,
Madagascar!⁹⁾

独立後はフランス語表現のマダガスカル文学 *la littérature malgache* は行なわれなくなるが、希望と幻滅の交錯する1972年5月の政変を体験した Michèle RAKOTOSON (Madagascar, 1948～) は辛辣な報道記事や短篇小説を発表して、その復活を試みた。彼女の単刀直入で半ば強迫的な筆致は女性特有の感受性や欲望の発露と見ることもできるが、実際はマダガスカル社会に重く申し掛かるタブーと国家の崩壊を目の当たりにした怒りと混乱を全世界に伝える手段であった。*Dadabe* (1984), *le Bain des reliques* (1988) などの作品がある。

以下は苦しい試練を経て、*Dadabe* の語り手が Tananarive の街を再発見する件である。

Et je la retrouvais telle que dans mes souvenirs, telle que dans mon enfance. Je la voyais vivre, je la voyais réagir, en semaine, les dimanches. Chaque dimanche, encore dans les quartiers de la haute ville, j'ai pu voir arriver, hiératiques et fières, les femmes allant à l'office. Le chignon tressé sur la

nuque, sans un geste de trop, très lentes, drapées de leur lamba et de leur dignité. Chaque dimanche encore, les hommes les suivent, à pas mesurés, déférents et pleins de courbettes.

Chaque dimanche encore, ici, un rire eût été parfaitement déplacé.

Dans ces quartiers aristocratiques, silencieux, repliés sur eux-mêmes, il eût été parfaitement malséant de montrer son visage aux fenêtres.

Lâ, les enfants restaient dans les cours ou les maisons. Lâ, la première vertu était le silence.

Mais ce silence était différent du silence qui était mien actuellement, ce silence était voulu, accepté.

.....¹⁰⁾

マダガスカルでは他に RABEARIVELO の遺志を継承して繊細な翻訳詩を書いた Flavien RANAIVO を忘れてはなるまい。

*

拙論『第三世界のフランス語文学——オセアニア・インド洋の場合——』¹¹⁾では全体として各地域の作家に混成言語・混成文化をむしろ屈託なく謳歌する姿勢或いは積極的ではないにしろフランス語・フランス文化に迎合しようとする態度が前面に現われていたように感じられたが、マダガスカルの場合は旧植民地の悲劇と抵抗の歴史が強調され、作品の表面の輝きを失わせ、艶のない、何かしらザラザラとした肌触りのものになってしまったようだ。しかし、同じクレオール文学の世界ながら、アフリカ大陸・中米・南米・カリブ海域の旧植民地の如く諸作品が共産主義或いは社会主義による植民地解放闘争のプロパガンダの中心的存在として位置づけられることはなく、虐殺と強制連行の怨念が混成言語・混成文化の裏面にぴったりと張りついているほどの重苦しさは感じられない。それらがフランス政府や

フランス人と言うよりも、独立の過程で幾度となく政変を繰り返した自国政府或いは自国民の不手際へと向かっているからではなかろうか。

オセアニア・インド洋の植民地でもその独立や自治権を求めて武装蜂起した人々に銃弾や砲弾の雨が降り注いだのは事実である。マダガスカルでは前述の如く1947年3月、自治権を主張した東部地域の反乱で、8万から10万人の死者が出ており、その後10年に及ぶ弾圧があったことを忘れてはならない。しかし、少なくともフランスによる植民地政策に於いて、オセアニア・インド洋の島々では、先住民の掃討による根絶やしが行なわれなかったのも事実なのだ。虐げられたが生き残った原住民の息づかい *spiritus* が今も聞こえるのである。ただマダガスカルでは先住民族や連行された黒人たちが神との同化を獲得したものの、その代償として宗主国に故国と故郷と母語を奪われたことを全面的には許していないようである。

平成11年10月12日神戸にて

(芦屋大学教授)

註

- 1) 中島昭子；シンポジウム《琉球とフランス》(1997年度日本フランス語フランス文学会秋季大会)，沖縄県中頭郡西原町（琉球大学），1997.
- 2) ロジャース，メアリーM.，草野 淳訳；『目で見える世界の国々⑦ マダガスカル』，東京，国土社，1997，p.p. 19-37
- 3) JOUBERT, Jean-Louis; LECARME, Jacques; TABONE, Éliane; VERCIER, Bruno; *LES LITTÉRATURES FRANCOPHONES DEPUIS 1945*, Paris, Bordas, 1986, p.p. 79-81.
- 4) *ibid.*, p. 81.
- 5) *ibid.*, p. 82.
- 6) *ibid.*, p. 82.
- 7) *ibid.*, p. 83.
- 8) JOUBERT, Jean-Louis; *Littérature Francophone ANTHOLOGIE*, Paris, NATHAN, 1993, p. 339.

- 9) *ibid.*, p. 208.
- 10) *ibid.*, p. 373.
- 11) 伊川 徹；第三世界のフランス語文学——オセアニア・インド洋の場合——，
「関西大学東西学術研究所紀要」第32輯，1999，p.p. 1-12.